【288】

氏　名（国籍）	ジョセフ・ジョンソン（アメリカ）
学位の種類	博　　士（文　　学）
学位記番号	博　乙　第　1931　号
学位授与年月日	平成15年4月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**Facing Plato's Problem in Linguistics : Philosophical Issues of Chomsky's Thought** （言語学におけるプラトンの問題：チョムスキーの思想と哲学的論点を巡って）

主　査	筑波大学教授	文学博士	藤　田　晋　吾
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	谷　川　多佳子
副　査	筑波大学助教授	博士（文学）	橋　本　康　二
副　査	筑波大学教授	博士（言語学）	鷲　尾　龍　一

論文の内容の要旨

本論文は，チョムスキーの言語理論に含まれている認識論，心の哲学，科学哲学を批判的に検討したものである。チョムスキーが「プラトンの問題」と名付けた問題とは，人間は，言い間違いや不完全な文さえ含むような有限個の言語データしか与えられていないにも拘わらず，いかにして無際限に多くの新しい文を発話したり理解したりすることができるのか，という問題である。この問題に答えることは，取りも直さず，母語が獲得されるメカニズムを解明することであるが，チョムスキーは極めて大胆な仮説と提言を含む研究プログラムを提示することによって，この問題に答えた。しかし「言語学は心理学の一分野である」「心理学は生物学のうちに解消するであろう」という主旨の彼の提言は，十分な検討を抜きにしては容易に肯んじえない主張である。本論文の主題は，プラトンの問題へのチョムスキーの解答が孕む哲学的争点の検討である。

本論文の概要は次のとおりである。

チョムスキーの革新性は，言語獲得における「刺激の貧困さ」への着目にある。これを彼はプラトンの問題と呼ぶので，まず第1章において，プラトンの問題がプラトン自身によっていかに扱われたかを見る。プラトンは霊魂と身体の二元論に立ち，霊魂がイデアを想起するという比喩によってこの問題に答えた。しかし，この比喩は真の問題の在処を示すプレース・ホールダーとして以上の意味を持たない。この章の目的は，プラトンとの対比によってチョムスキーの観点を際立たせることにある。第2章は，プラトンの問題に対するチョムスキーの解答を概観する。チョムスキーは，プラトンがしたような非物質的な心やイデア的対象の存在を要請するようなことはしない。彼がその代わりに置くのは，人間の脳に生得的に備わっている言語獲得装置（LAD）である。彼が普遍文法と呼ぶものは，このLADの初期状態の抽象的記述である。この普遍文法仮説と生得性仮説とがチョムスキー理論の特徴であるが，これは経験主義的・行動主義的な言語学習観と根本的に対立する特徴である。第3章は，言語の獲得を「知識」と呼ぶことの妥当性，LADの働きを「規則に従うこと」として特徴づけることの妥当性，チョムスキーの理論はこびとの存在を想定するとの揶揄，等に関して，ネイゲル，クワイン等の批判に言及する。しかし，本論文によれば，誤解を招く用語法上の難

点を新しい専門用語で改善することは可能であり，その場合でもチョムスキーの中心的主張は崩れない。

第4章と第5章は，本論文の哲学的核心である。第4章の問題は，チョムスキーのLAD仮説のような言語心理学的モデルが「実在性」を持ちうるか，ということである。クワインはこれに否定的な見解をとるが，そのクワインでさえ，例えばBeverの実験結果が言語構造の心理学的実在性を示すものだ，と認めている。現在知られている最良の言語学理論に実在性を認めないのは，著者によれば，不適切である。だだし，チョムスキーのモデル自体が流動的である実状を考慮すると，理論の細部にいたるまで実在性を帰属させることはできないとする。すると次に，普遍文法という抽象的記述も，最終的には脳科学と遺伝学のタームで理解できるようになるか，という問題が持ち上がる。これが第5章で論じられる問題である。チョムスキーによれば，脳についての事実によって説明がつかないような言語についての真理は存在せず，したがって言語学は将来生物学の一部となる。著者はこの章で，クワイン，パトナム，クリプキ，サール，フォーダー等による還元主義批判の論点を総動員し，チョムスキーのこのような還元主義を説得的に批判するとともに，チョムスキーの見解をディレンマにまで追い込んでいる。

最後の第6章は，第5章までに得られた結論の総括と今後の研究の方向付けである。著者は第4章で，チョムスキーのモデルに実在性を帰属させ，第5章で，言語についての真理は生物学に還元不可能だ，と論じた。そして，非法則的一元論（anomalous monism）を自らの哲学的立場とする。チョムスキー理論の重要性を認めながら，その不十分さを補完するものとして，言語獲得における言語心理学的次元，神経生物学的次元，社会的規範的次元が統合されるような言語研究の必要性を説く。

審査の結果の要旨

言語学におけるチョムスキー理論の革新性は「チョムスキー革命」「チョムスキー的転回」と呼ばれ，その影響は言語学の世界にとどまらず脳科学の分野にまで及び，こんにちでは認知科学のパラダイムとさえ見なされている。彼が「プラトンの問題」と称した「言語データの貧困さ」という問題は，行動主義的言語学習説では説明不可能な言語の事実である。本論文は，チョムスキー理論の熱心な信奉者として出発した著者が，クワイン，パトナム，クリプキ等の哲学者たちによるチョムスキー批判を咀嚼し，論理的な公平さと健全な批判的態度を貫いて，チョムスキー革命のいわば「行き過ぎ」を糺したものである。著者の論述はきわめて明快であり，上記「論文の要旨」には到底収まり切らない多様な争点を説得的に論じている。とくに第5章が優れており，「言語学の生物学への還元不可能性」の論証はきわめて説得力に富む。本論文は，全体として見ると，大変見通しよく構成され，論ずべき問題点を平明かつ明快に論じている。チョムスキー理論の持つ哲学的側面をこれだけ明快に論じた論文は，日本ではもちろん，世界的にもあまり例がないように思われる。

しかし，本論文はチョムスキー理論の哲学的側面に焦点を絞ったため，チョムスキーの理論が言語学の理論としてどこまで検証されているか，また，言語学内部からいかなる批判が出ているか，という点については手薄になっている。言語獲得装置にせよ普遍文法にせよ，その抽象的な規定が提示されるだけでは，言語学の理論としてどこまで成功しているのか判断できない。また，言語学の理論としての妥当性が確かめられなければ，チョムスキーの理論がいかにプロージブルであれ，その言語心理学的モデルの「実在性」を擁護するには弱すぎるように思われる。

他方，本論文を哲学的議論として読むと，チョムスキー批判の哲学者たちの立脚する哲学的見地がいくぶん蔑ろにされているような印象を受ける。著者が還元主義批判の論拠として援用しているクワイン，フォーダー，サール，パトナム，クリプキの哲学的見地には，それぞれの間で大きな開きがある。また，著者はデイヴィドソンの非法則的一元論をよしとするが，この立場には，token-events間の同一性の規準をいかにし

て与えうるかという周知の問題がある。著者はチョムスキー理論の哲学的一側面を批判するのだが,「生得性」に集中するチョムスキー理論の枠組み自体があまりにも従来的で，そのため二十世紀の言語哲学の争点が還元主義批判の背後に隠れてしまっている。もしも還元主義批判の背後に隠れたその争点を描き出し，言語に対する哲学の側からの関心が言語学のそれとどのように異なるかという点にまで論及すれば，より一層説得力のある哲学論文に仕上がったのではないだろうか。

なお検討を要するこうした問題は，著者の今後の研鑽に期待すべき課題であるが，本論文は，チョムスキーの言語理論が孕む哲学的問題を検討するという所期の目的を十分に達成しているので，これだけでも既に，貴重な研究成果として高く評価できる。本論文は言語学界と哲学界の双方に対して寄与するところ少なくないであろう。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。